

## はじめに

私は眼科医としてドイツに留学したが、2年間の医学研究生活を送った後、フランクフルト音楽大学に入学してピアノを勉強し、卒業後はピアニストになり、またドイツの音楽大学にて音大生を教育する立場になった。音楽家をやめて医者になる人は時々いるが、その逆はあまりいない。普通の人には考え難いこの人生の転換が、なぜ、どのようにして行われたかを説明することは、お世話になった多くの方々に対する私の義務であると思うし、また、それがあまりに常軌を逸しているだけに、一般の人々にとっても、その事情を知るのには興味深いことかもしれないと考え、この拙文を世に出すことにした。

私は幼少時よりピアノを習い、小学生のころには、将来は絶対ピアニストになるのだ、と思っていた。ところが、我が家の経済力では音楽を勉強することはまず不可能である事に気が付いたので、中学生のころ音楽の道に進むことを断念し、かわりに医学部を目指した。京都大学医学部で勉強したのち、眼科医になり、さらに京都大学大学院に進んで視覚電気生理学の研究により博士号を取得した。

私が医学生だったのは、丁度学園紛争の嵐が一番激しく吹きすさんでいた時代にあたり、1年あまりもストライキが続く、といった異常な状況だったが、そのおかげでピアノのための時間がたっぷりあって、毎日京都大学音楽研究会に入り浸って独奏や伴奏をして楽しんでいたので、大学時代にピアノの腕は上がりこそすれ、衰えるようなことはなかったと思う。また、時には専門家の藤村るり子先生、マックス・エッガー先生にレッスンしてもらっていた。

しかし、アマチュア・ピアニストの私が人前で演奏するのを快く思わないプロの方もいたので、時には、今から考えれば不当と思われるような批判を受けたこともあった。そのため、日本にいる間は、「自分はアマチュアとしては上手いとしても、専門家の方々の演奏には、何か私には分からない特別の資質があって、どう逆立ちしてもかないっこない」と信じ込んでいた。

医学博士号を取得したころ、当時京大医学部眼科学教室講師で、私の研究の指導にあたっておられた本田孔士先生（後、京都大学医学部教授）が、ドイツ留学を考えてみては、と言われた。医学研究はアメリカが一番主流なので、先輩の多くはアメリカへ留学していたが、私が音楽好きだからドイツに、と考えるてくださったのだ。本田先生は付き合いの広い方で、世界中に親しい医学者がいたから、ドイツの研究所と交渉する事も可能だったのだ。私にとっては夢のような話だった。早速、ドイツ政府のフンボルト奨学金に応募したところ、幸いにも合格し、ドイツに行けることになった。しかしその時点では、音楽の勉強をして転職しよう、というようなつもりは全くなく、ただ、大作曲家を数多く生んだドイツへのあこがれから、一時そこで暮らしてみたい、と思っただけであったので、京大病院での助手としての席は残したまま、休職してドイツに渡った。1980年の夏のことだ。

## 第一章

ドイツ行きの飛行機は格安の大韓航空で、パリ行き。パリで一泊して、電車でドイツに向かう、という予定だった。一人旅にしては大胆で、心細く思っていたが、飛行機のなかで、同じように安旅をしようという知り合いがすぐに出来、4人のグループになった。私以外はみな男性だった。うち一人は京大農学部の大学院生で、すでにフランス留学の経験があり、フランス語堪能だった。これは極めて有難い。フランス人は英語など理解しないか、理解してもしていないふりをするので、旅行者は途方にくれてしまう事が多いのだ。あとの3人はすっかり彼に頼りきって、パリについたらその晩のホテルを見つけてもらった。シングル・ルームは安いわりに清潔で広く、長く飛行機に乗ったあとでは、古い大きなバスタブが嬉しかった。

夕方には4人で映画館に行き、大島渚監督による「愛のコリーダ」の無修正版を見た。噂どおり凄いが、いやらしいという感じを我慢すれば、訴えたいことがある程度分かるような気がした。画面に大写しされた主演女優の口から「いいよう、いいよう、」という文句が洩らされている時、ちらとフランス語の字幕を見ると、「bon, bon,」となっている。単に「いい、いい、」というだけで、日本語の持つ風情は全くない。翻訳では、この程度にしか表現できないらしい。フランス人は気の毒に、映画の面白さが半減しているじゃないかと、愉快であった。

このグループのうち一人、明らかに一番の年長者である人が、「俺はアメリカで交通事故に遭うてなあ、かなりの重傷を負うたんやけど、たった1日だけ入院して、そのために150万円ばかり払って、すぐさま日本に送還されたんや。そのせいで、顔の一部が麻痺してしもたんや。」と言うので、「何で、そんなにすぐ、日本に帰らなくちゃいけなかったのですか。」と一人が訊いたが、「まあ、それには事情があつてなあ、」というだけで、口を噤んだ。この人と同じ部屋に泊まった京大生の話では、彼はもっといろいろ、胡散臭い事を話していたのだそうで、あれはスパイかなにかに違いない、とあとの3人で憶測し、私はこれから入っていく未知の世界の不気味さと面白さを半々に感じた。

私がドイツに着いて最初に行ったのは、バイエルン州、ミュンヘンから電車で約2時間走ったところにある、小さな湖のほとりのコッヒェルという村だ。ここのゲーテ・インスティテュートで最初の4ヶ月間ドイツ語を学ぶ、というのがフンボルト協会が決められた留学生としての任務だった。

その村にたどりつくのは、実はあまり簡単ではなかった。私は日本で半年ばかりドイツ語の勉強をしてあったから、初歩の文法は一応頭に入っていたが、会話となると、まるでちんぷんかんぷんだだったので、日本で見た地図では虫眼鏡でやっと見つけたくらいの辺境の地、コッヒェルに、どうやって行くのかと、ミュンヘンで駅員などに尋ねても、とても理解出来ない説明が帰ってくるばかり。どうやら何処かで乗り換えないといけないようだ、とだけ分かった状態で電車に乗り込んだ。

一時間ほど走ったところで、電車は色とりどりに花が咲き乱れる湖畔の駅についた。ノイ

シュヴァンシュタイン城などメルヒェン風のお城をいっぱい建てたので有名な、狂気のルートヴィヒ2世が亡くなった場所、シュタルンベルク湖だ。もしかしたら、このあたりで乗り換えかもしれないと思い、あわてて、周囲にいた人達に「コッヒェル、コッヒェル」と叫んでみせたら、一人のおばさんが「ここで降りて、あの電車にのりなさい」と教えてくれた。こういう親切な人はドイツではどこにでもいるもので、日本人がヨーロッパに来たら大抵感激する。日本人は一般的に、見知らぬ人とはかかわりあいたくないという傾向があって、同じ事を日本でやっても、みんなそっぽを向いてしまって誰も助けてくれない事が多いからだ。日本でやたらに多い痴漢がドイツにあまりいないのは、そのせいだと思う。被害者が声を出そうものなら、周りの人がすぐ応援にかけつけ、そんな破廉恥なまねをした者は、公衆の真ん中でさらし者になることうけあいた。だから誰もそんな事をする気にならないのだ。

それはさておき、そうして乗り換えた電車では、私の隣に、若く理知的な感じの女の子が座っていた。片言で話し掛けたら、彼女もコッヒェルのゲーテ・インスティテュートに行くのだとわかり、すっかり安心した。彼女は私と違って、ドイツ語が既にペラペラだったからだ。フランス人で、エヴリンという名だった。

彼女のおかげで、夕方7時ごろ無事ゲーテ・インスティテュートに行き着いたが、そこで宿舎を紹介してもらったつもりだったのに、時間が遅すぎたらしく、閉まっていて誰一人いない。どうしたらいいかと訊こうにも、何分田舎町で通りかかる人もない。明日から授業が始まるというのに、何たるサービスの悪さだろう、と思ったが仕方がない。2人とも途方にくれた。しばらく考えた末、エヴリンは、今からユースホステルを探そう、と言う。地図で見ると、かなり遠いところに、確かにユースホステルは存在するらしいが、そこまで行ったとしても、部屋が空いているとは限らない。すぐ近くにこざっぱりした旅館が見えているのだが、彼女は、お金がないからそんな所には泊まれないと言う。ヨーロッパ人の学生は、必要最小限のお金しかもっていないという事が、この時わかった。しかし、私は重い荷物をかかえて、とてもユースホステルまで行ってみる気がせず、かといって「私はここに泊まりますから、さよなら」とも言いにくいので、「貴方の分は払ってあげるから、ここに泊まろうよ。」と彼女を説得し、その晩はその「ポスト旅館」に一緒に泊まった。翌日から、ゲーテ・インスティテュートでドイツ語の勉強が始まった。まず、クラス分けの試験があった。簡単な筆記試験のみで、口頭試問は無かった。そしたら、私はいい点をとすぎたらしく、かなり出来る人のための「中級」のクラスに入れられてしまい、エヴリンと同じクラスになった。こんなはずは無いが、とあわてふためきつつも、仕方なく授業を受け始めたら、案の定、さっぱり分からない。1時間目のあとで、先生に窮状を訴えた。同じ様に困っている人が、他にも何人かいた。先生は「あの試験は正確だから、貴方たちはよく出来るはずだ。もう少しここで続けてみてはどうですか」と引き止めにかかったが、私とアメリカ人のキャシーの二人は断固頑張って、一段階下のクラスに変えてもらった。

新しく私が入ったクラスは、ドイツの大学で勉強するための必須条件とされる、語学検定試験の準備を目的としたクラスで、全部で20人あまり、フランス人、イタリア人などのヨーロッパ人以外に、アメリカ人、トルコ人、ヨルダン人、さらにはパレスティナ人までいて、極めて国際色豊かだった。もう一人の日本人、市野君は私より1学年下で、何と、私が通った大阪府立天王寺高校と同学区内の住吉高校出身で、阪大出身の言わばお隣さん、まさに、世界は狭いという感じだった。

このクラスでの授業内容は、丁度私のドイツ語能力と合っていたらしく、勉強するのがとても楽しかった。私は、相変わらず喋るほうはあまり得意でなくて、ろくろく何も言わないのに、テストがあるといやにいい点をとるので、先生がみなの前で驚かせてみせたりした。市野君は非常に勤勉で、いつのテストでも私よりさらにいい点をとっていた。アメリカ人やヨーロッパ人は、文法能力のさほど無い人でも、みなべらべら自由に喋れて羨ましかった。級友のドイツ語能力は総じて似たり寄ったりだったが、パレスティナ人だけは、文法を学ぶのがとても不得手のようで、落ちこぼれだった。

この期間住んでいたのは、50歳くらいの太ったおばさんの家で、トルコ人のナディアと同居だった。彼女は私と同じくらいの年で、専門が何だったかは忘れたが、私と同様に博士の称号をもっていた。彼女は結婚していて、幼い娘を家においたまま一人でドイツ語の勉強に来ていた。トルコ人と知り合いになったのはこのナディアが初めてだが、程なく、ドイツ語を勉強中のトルコ人はいっぱいいることが分かった。やがて後になってから、ドイツ中に非常に多くのトルコ人が出稼ぎに来ていて、ドイツにおける人種差別の主たる被害者になっていることが分かったが、この時はまだ、トルコ人というものが珍しく、興味津々でナディアと話をした。

この家に初めてついた時、家主のおばさんが部屋の案内をしてくれたが、その際、風呂場で、「水はとても高いので、入浴は週一回にしてください。それ以上入浴したければ、1回につき5マルク支払うように。」と言われて、びっくりした。水が高いなんて、考えた事もなかったし、週一回の入浴とは、あんまりではないか。しかたないので、毎日、おばさんの留守を見計らっては、風呂場でクイック・シャワーを浴びることにした。

この家には家主のおばさん以外に、若いトルコ人で、太ってあまり教養の無さそうな男も住んでいて、私達は最初のころ彼を使用人だと思っていたのだが、そのうち、ナディアが彼とトルコ語で話しているうちに、どうやら彼はおばさんのツバメらしい、と分かってきた。寝室を共にしているという事で、その不釣合いな感じに、私達は2人とも気持ちが悪くなった。

ある時、おばさんとツバメの男が2人で長期の旅行に出かけてしまった。3週間くらいだったと思う。夏にそういう長期旅行をするのは、ドイツでは非常に一般的で、それを楽しみに、あとの時期は働いてお金をためる、というのが普通のドイツ人の暮らし方なのだ。ちょうどその旅行の直前に、この家の猫が子供を産んだのだが、私達はああしてくれ、こうしてくれといった指図を一切受けていなかったのも、よその部屋に勝手に入る事も出来

ず、放ってあった。しかしどうにも心配で、どうしよう、どうしよう、飢え死にした子猫の死体がそこら中にころがっているのじゃないか、と言い合った末に、ナディアが一度猫のいる部屋をのぞいてみたら、予想通りに極めて汚くなっていたそうだが、仕方ないのでそれでも何もしないでいた。しばらくしたらお婆さんの娘がどこかからやってきて掃除などしていらしいが、ともかく、変な家だった。

ゲーテ・インスティテュートのホールにグランドピアノがあり、誰でも自由に弾かせてもらえた。音楽の勉強を目的に来ている人が数名いるから、アマチュアの私がいっぱいピアノを占領しているわけにはいかなかったが、それでも指がなまってしまわない程度には練習できた。ある時、ゲーテ内で学生の演奏会があり、私はシューマンのクライスレリアーナを独奏したのと、声楽を勉強に来たバリトンの岡部君の伴奏でセヴィリアの理髪師のアリアなどを弾いた。アメリカ人のピアノ学生もバッハの平均率を弾いたが、あまり目立った演奏ではなかったのだから、私は一躍ゲーテ内での有名人になった。ジュードドイッチェツァイトウングという大新聞の地方版にその演奏会の批評がでて、私は初めて自分の演奏の批評というものを経験し、非常に嬉しかった。

ある時、級友のアメリカ人の女の子と、トルコ人のヤーチンが2人でどこかへ2日間ほど授業をさぼって遊びに行った。女の子の方は特別優秀ではないピアノの学生で、容貌もぱっとしないが、ドイツ語はクラス中で一番に出来、やや高慢なので、同じアメリカ人のキャシーなどは彼女を嫌っていたから、彼女がヤーチンとランデヴーしていた時にはさんざん悪口を言っていた。ヤーチンは私と同じくフンボルト留学生で、ほかの級友よりはやや年上、知的でなかなか素敵な男だったから、当時私たちのクラスを担当していた女の先生のお気に入り、特別扱いされていた。

演奏会の頃から、私に個人的なファンができた。韓国人のキム君だ。キムという苗字は韓国に非常に多く、韓国人の半分がキムさんじゃないか、と思うくらいなので、名前のほうで呼ぶべきところだが、ウェージュンという名前はとても発音しにくいので、私はキム君と呼ぶことにしていた。彼は別のクラスだったが、ドイツ語の能力は私と大体同じくらいだった。専門は森林学、フンボルトでも DAAD でもない、何かの奨学金で1年間の予定で来ていた。この奨学金は発展途上国用のもので、韓国はもう殆どあてはまらないのだけど、ぎりぎりの所でまだもらえているのだ、と言っていた。彼は非常に誠実な人柄で、たいしてハンサムではないし小柄だが、スポーツマン風にながしりした体格だった。

キム君から、韓国人の間での話題を色々聞けた。韓国では兵役があるが、北朝鮮の侵略の危険に常にさらされているので、やむを得ない事であるとか、日本人が戦時中に韓国でやった色々な蛮行のために、日本人というのは、戦闘的かつ卑劣な国民だと韓国人が思っている、という事などを彼から初めてきいた。平和ニッポンに慣れきっていた私には思いもよらない事だった。彼と色々、限られた語彙のなかで会話をしたことは、私の日常会話能力を高めるのに非常に役立った。

当初の予定では、私は4ヶ月間、ゲーテ・インスティテュートで語学ばかりやるはずだっ

たのだが、2ヶ月たったところで、私の医学研究の指導者であるバート・ナウハイムのドット教授を訪ねたところ、それだけ喋れるならもう充分だ、はやく来なさい、と言われたので、その時点でゲーテは打ち切りにして、バート・ナウハイムのマックス・プランク研究所で医学研究を始めることにした。

キム君は、初めの予定通り、あと2ヶ月ゲーテに留まった。大学の夏休み期間にあたる最初の2ヶ月は、世界各国から学生が集まって来ていたので、若々しい雰囲気、活気あふれていたのだが、秋になるとロシア人を中心とした出稼ぎ労働者が多くて、あまり面白くなかったのだそうだ。私が後半の2ヶ月を端折ったのは正解だったようだ。

## 第二章

バート・ナウハイムのマックス・ブランク研究所では、研究所の建物の最上階にある客室に住んだ。小さい部屋だったが、天井が非常に高く、どれくらいの大きさだったのか、よく判断できない。日本の部屋と比べれば、そう小さくもなかったのかもしれない。客室は4部屋あって、その中ではともかく一番小さい部屋だった。台所と風呂場は共同だったが、全室が塞がっていることはめったに無く、大抵のときは私専用だったので、少しも困らなかった。

私とほぼ入れ替わりに日本に帰る金沢大学の吉田君（仮名）から古いアウディを譲り受けた。この車は、2500マルクと安かったから文句は言えないが、故障ばかりで費用がかさみ、どうしようもない車だった。アウトバーンの上で立ち往生し、緊急電話してADACという自動車クラブに助けに来てもらう、というようなことが何度もあった。その人たちが修理してくれるのを見ているうちに自分でもだんだん分かってきて、「あ、又だ」と思ったら路肩に停めて自分で緊急修理をし、また走り出したこともある。ともかく、「安全」とは言い難い車だった。

そのころドイツの北の端に近いキールで学会があり、吉田君と2人で行った。途中ハンブルグで、有名なレーパーバーンという赤線地帯を2人でたずねた。彼が、帰国までに一度は見ておきたい、というので、付き合っただけだ。勿論、女性見物者の行くべきところではない。入り口のさび色に塗られた鉄門に、「女性入場お断り」と書いてあったのだが、そのドイツ語が理解できず、「女性が待っています」と書いてあるのだと勘違いしたので、平気に入ったのだ。ガラス窓の向こうにいる、色々にポーズをした娼婦の方々が、いやそうな目つきで私を見た。

その夜、ハンブルクのホテルで、私と吉田君は隣同士の部屋だったのだが、夜中に彼が私の部屋のドアをノックした。幸いにしてちゃんとカギをかけてあったので、「ここ、カギかかっている？」ときかれ、「うん、ちゃんとかかっているから、心配してくれんでもええよ。」と追い返したら、今度はヴェランダからやってきて、また「ここも、ちゃんとカギかかっているんだ」という。「そうやよ、お休み」とまた追い返した。同僚といっても、時には用心しないといけないものだ、と思った。

ドット教授のはからいで、私はブルガリア人のポポフと2人で共同研究を行うことになり、バンガーターフォリエというものを使って視覚誘発電位の研究をはじめた。被検者の視力をこの半透明の膜で段階的に落とすにつつ、脳波を記録して、客観的な視力測定に役立てよう、という計画だ。実験はナウハイムから40kmほど離れた、フランクフルト大学医学部の屋根裏にある、マックス・ブランク研究所の出張所で行ったので、車で毎日フランクフルトに通った。片道40kmといったら長いようだが、大半はアウトバーンだし、日本のようなひどい渋滞に巻き込まれることはまれなので、通常30分しかかからなかった。実験をはじめたら、そのうち、だんだんにポポフのやる事なすことに我慢ができなくなってきた。彼は教授に言われたとおりの事しか絶対にしようとせず、たとえ、実験結果が当

初の見込みと違っていても、何故か、と疑問を持って実験をしなおすとか方法を変えてみるとかはしない。私が「このままじゃ駄目だから、こうして見ませんか」と提案しても、「教授から聞いていない」の一点張りである。すっかりあきれて、ドット教授に「彼とはとても一緒に仕事できません、何とかしてください、」と訴えた。教授は、私の訴えを直ぐに聞き入れてくださって、その後はエヴァという若いドイツ人と共同研究し、順調に進んだ。ポポフは私以外の研究所員からも嫌われ、すべての行動が共産圏出身らしく兵隊風にぎくしゃくしている、という理由から「鉛の兵隊さん」というあだ名がついていた。

研究所にはもう一人、矢島先生（仮名）という日本人がいた。彼はもと工学部出身でコンピューターにかなり詳しくかったので、非常によく助けてもらった。この頃はまだコンピューターは一部の専門家のみのもので、医学だけ勉強した私にはもひとつ分けのわからないものだったから、トラブルがあるごとに助けが必要だったのだ。

パート・ナウハイムの研究所には古いアップライトピアノがあって、そこで毎晩練習した。ドット先生は歌がお好きで、シューベルトやシューマンの歌曲をよく伴奏してあげた。ハイ・バリトンで、声量はあまり無かったが、本当に心をこめて歌っておられた。それを生きがいにしておられる、という感じだった。

先生には2度目の結婚による奥さんとまだ小さい娘がいて、この娘を非常にかわいがっておられた。奥さんはドット先生と全く違い、派手で虚栄心の強そうな人で、研究所員はペこぺこしながらも、実はみな陰で悪口を言っていた。もとの奥さんとの間の2人の息子はもう成人している。上の息子は父親同様に生理学をやっており、時折たずねて来ていたので何度か会ったことがあるが、下の息子は母親にべったりで父親を憎んでいるとの事だった。ドット先生自身はこの息子のことをとても心配しておられて、彼がやりたがっている映画監督の勉強ができるようにと、あれこれ尽力しておられたのみならず、ガールフレンドまで世話された。ずっと後になってからのことだが、私と親しかった日本人のソプラノ歌手がドット先生の頼みでこの息子と会い、しばらく付き合ったが、彼の自主性に欠けた、何でも父親のせいにする態度に腹を立て、そこそこで別れてしまった。

パート・ナウハイムでの研究生活が軌道に乗り出したころ、友達のキム君はフランクフルトから200kmばかり北のほう、カッセルに近い田舎にいて、週末にはよくフランクフルトにやってきた。電気生理学研究の被験者をすればいくら時間給がもらえたとし、彼の奨学金は低額だったので、アルバイトさせてあげるべく、彼を被験者にして「アジア人とヨーロッパ人の視機能の相違、電気生理的特色」とでも名づけるべき実験をした。すると、アジア人とヨーロッパ人では光の強さ、及びコントラストに対する眼の反応の仕方が全く違っている、という非常に面白い結果が出て、今考えてもバンガーターフォリエよりは有意義な研究だったのだが、発表はせずに留まってしまった。彼は8ヶ月間カッセル近郊に滞在したのち、韓国に帰国した。

フランクフルト大学には日本人の研究者が数人いて、金曜日の午後には、しばしば一番年長の渡辺さん（仮名）のところに集まって一緒にワインを飲んだ。その後はいつも、かな

り酔っ払いつつ、自動車を運転してバート・ナウハイムに帰った。当時は、飲酒運転の取り締まりがあまり厳しくなかったのだ。

ある時、他の人が来られなくて、渡辺さんと2人だけで飲んだら、彼が酔ったはずみに、「可愛いよ」と言いつつ私に抱きついてきたので、あわてて逃げ出した。その後は、どうも彼は私に惚れてしまったのか、機会あるごと、たとえばエレベーターの中などで私に接近をはかってくるようになり、以後は、絶対2人きりにならないよう、気をつけた。

これより何年もたってからの事だが、いっぱい人が集まったパーティーの席で、渡辺さんはワインで酔っ払ってしまい、人前であることも忘れて私を追いかけて廻るので非常に恥ずかしい思いをした。ドイツ人は通常ワインの1杯や2杯ではまずそこまで酔っ払わない。日本人はそれに比べると非常にアルコールに弱くて、すぐに常軌を逸した行動をはじめ。何かアルコールを分解する酵素が足りないのだ、というのが通説になっている。ともかく、彼はそれほど悪気が無さそうなのだが、さかりがついた犬みみたいな様子を人前でさらすので、どうにもいたたまれなかった。

ある夜、研究所の最上階にある自分の部屋にいたら、誰かがノックしたので、部屋のドアを開けたところ、隣の部屋にそのころ1週間ほど滞在していた台湾人の教授が「May I make love with you?」と大きく書かれた紙を持って立っていた。ろくろく話もしたことないのに、一応医学者である私にむかって堂々とそんな事を言うなんて、何と言う破廉恥な奴であろう。これなら惚れたはずみで私に襲いかかった渡辺さんのほうがまだましである。ノー、ノー、と言ったら、「なぜ駄目なのだ？誰も知らないじゃないか。」と言う。すぐさまピシャリとドアをしめ、カギをかけた。翌日出会ったが、別に恥じ入っている風でもなかった。あきれた人間もいるものだ。

千葉大学眼科の安達恵美子先生が、時折日本から来られ、バート・ナウハイムで実験をしておられたので、何度かお会いする機会があった。先生は非常に小柄ながら、美しく、鋭敏な方で、外国人の間で堂々と自分の意見を述べられるのが印象的で、私や同僚の憧れの的とでも言うべき存在だったのだが、その先生がある時、「自分はイエローであるというコンプレックスをずっと持っている。」と言われ、大変驚いた。多くのヨーロッパ人から尊敬の目で見られている先生にそんな劣等感があるとは、思ってもみなかったからだ。私は先生よりちょうど10歳年下だが、そういったコンプレックスを感じた事は全くない。世代の相違が感覚の相違になるのだろうか。戦前生まれと、戦後生まれの差だろうか。それとも、小さい時にピアノを習ったカナダ人のシスターのおかげだろうか。先生は私がコンプレックスを持っていないことについて、羨ましい、とおっしゃっていた。

ドイツに来て1年足らずの頃、フンボルト留学生のためのドイツ一周バス旅行があった。3週間にわたり、25人くらいのグループで当時の西ドイツを廻った。

このグループはフランクフルト近郊にいる留学生を集めたもので、学問分野は色々だった。日本人は私の他に、工学の白井さん(仮名)と、ドイツ文学の教授がいたが、このドイツ文学者はあまりドイツ語を喋れないので、他の人に陰で馬鹿にされていた。余談であるが、

独和辞典の著者として有名なさるドイツ語学者もドイツ語が全く喋れず、初めてドイツに来た際、あまりのことにショックを受けてずっとホテルに閉じこもりきりだった、という話を聞いた事がある。実に滑稽で信じがたいが、このドイツ文学者の様子を見れば、頷けないこともない。白井さんは穏やかで親切な人で、この旅行中よく一緒に歩いたが、ずっと後になって、日本に帰国後、某大学の教授になられた直後に自殺されたそう。それを聞いたときには、あんないい人が何故、と驚愕し、非常に悲しかった。

日本人以外の参加者と言え、まず、ただ一人のもとの知り合い、ゲーテ・インスティテュートで一緒だったトルコ人のヤーチンが、非常に美しい奥さんをつれて来ていた。この旅行は、配偶者も参加できたのだ。ゲーテでブスのアメリカ人をガールフレンドにしていたことについては、忘れたふりをしてあげたが、彼は最初私の顔を見たとき、かなりきまり悪そうな様子をしていて。あと、ポーランド、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ブルガリア、ソ連など共産圏からの人と、インド、中国、イギリスなどの人がいた。

共産圏と一口に言っても、国によって国民性が非常に異なっていて、例えばポーランド人とブルガリア人は最初から反目していたりして、興味深かった。国民の大半がカトリック信者であるポーランドでは、宗教を弾圧する共産政府を国民が憎んでおり、一方ブルガリアでは国民がおおむね共産主義の信奉者なのだ。

私がバスに乗車したのはバート・ナウハイムの北にあるギーセンという街だった。そこへ行く電車が遅れたために、電車の駅からバスの待っている場所まで、よく知らないギーセンの街中を大慌てで駆け抜け、待ち合わせ時間に10分ばかり遅れて、幸いまだ待っていたバスに大汗かきつつ飛び乗ったら、もう既にあとの全員は席についていた。

ギーセンから北に進み、ブラウンシュヴァイクでフォルクスワーゲンの工場を見学した。工場は広々として清潔、働いている人たちはえらくリラックスした感じで、私がそれまで持っていた「工場労働者」のイメージとは全く違っていた。技術責任者の説明会があり、私はあまり関心がなかったが、機械工学の専門家らしいブルガリアのワーニャ（女性）などは、熱心に議論していた。

そこから一路東に、ベルリンへと向かった。西ベルリンは当時共産圏東ドイツの中にあり、たった一ヶ所西に属する陸上の孤島だったので、ブラウンシュヴァイクを出てしばらくしたら、東西ドイツの国境を通過した。

国境では、ものものしい制服に身を固めた、東ドイツ国境警備隊による厳格な車内の取調べがあり、西ドイツの新聞は全部取り上げられ、写真撮影は禁止、カセットテープも見つかれば取り上げられた。東ドイツ内では一切車外に出ることは許されず、極めて殺風景な灰色の風景を見ながら、数時間走って西ベルリンについた。すると目の前に、嘘のように、急に華やかな大都会が開けた。

ここで2日間滞在したが、その間に、日帰り観光ビザをもらって、「ベルリンの壁」を通過し、東ドイツの首都である東ベルリンを散策する機会があった。第二次世界大戦前、ドイツの首都だったベルリンの中心地は大方、東ベルリンの側にあるから、経済的に落ちぶれ

ているとは言え、東ベルリンの雰囲気は格調の高いものだった。お腹がすいてきてあたりを見回してみたが、立派なレストランなど見当たらないので、みすばらしいキオスクのような所でタルタルステーキを買って食べたら、ものすごく安いわりには美味しかった。

東西ベルリンを駆け足でめぐったあと、バスでまた同じコースを逆戻りして西ドイツに帰り着き、そこから北にむかって、ハンブルグ、リューベックまで行き、今度は西よりに南下して、トリアーの近くでモーゼルワインの試飲会をした後、南ドイツのフライブルク、ボーデン湖、フュッセン、ミュンヘンをめぐり、そこから北上してニュルンベルク、ビュルツブルグをたずねて廻るといふ、素晴らしく盛りだくさんの旅行だった。

フライブルクの宿にピアノがあったので、ポーランド人の哲学者スワヴェックの提案で、その日の夕方、私のコンサートをすることになり、シューマンのクライスレリアーナとプロコフィエフの束の間の幻影を演奏した。

ミュンヘンでは、夕方に演奏会を聴こうと、旅行仲間と2人でキュヴィリエ・シアターの切符売り場で並んでいたら、通りかかった年配の女性が、「一緒に来なさい、券があまっているから」と手招きする。有り難くついて行ったら、無料でヨーゼフ・スークの率いる室内合奏団の素晴らしいコンサートを聴くことができた。

この旅行の間に、ポーランド人の数学者でヴァイオリンを弾くアンナと、イギリス人民俗学者でチェロを弾くアダムが、一緒に弾かないか、と提案してきたので、旅行のあと、彼らとトリオを一緒に演奏するようになり、パート・ナウハイムの研究所か、もしくはアンナのいるダルムシュタットで練習した。彼女の住んでいる家にピアノがあったからだ。ある時はフランクフルト大学の講堂で演奏会を開き、旅行グループのメンバーを招待して同窓会のように集まったし、ボンでフンボルト留学生全体の集まりがあった時、そこでも演奏したことがある。もっともアンナはリズム感が悪く、始終勘定を間違えるので、三人で一緒に弾けるのはリズムの簡単なバロックの曲だけだった。「私がなぜ勘定できないのか分かる？数学者だからよ。」と言っていた。数学者は、1、2、3、といった簡単な勘定も、つい、複雑なやり方をしては、間違ってしまうのだそうだ。

この頃に、ドット先生のはからいで、先生の別荘のある、クラインホイバッハという北バイエルンの小さな町で、リサイタルを開くことになった。ロミー・カルプというソプラノ歌手と一緒に、ピアノソロ半分、歌半分、というコンサートで、ソロの曲目はショパンの「アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ」及びラヴェルの「夜のガスパール」、歌はマヌエル・ド・ファリヤの「スペインの世俗的な歌」だった。歌の伴奏も私がした。

ロミーは、ずっと年上の非常に太った女性で、今まで聴いた事がないくらい特別な美しい声の持ち主だった。しかしややアル中の気があるのか、リハーサルの際、しばしば、その地方の名産であるアヒルのように首が細くて下半分が丸い形のボトルに入ったフランケンワインをピンごと口にあててゴクリと飲み、「ワインは喉にいい」と、自分に言い聞かせるように言っているのので、「ホントかしら」と疑いつつも、「へえ、そうですか。」と感心しているようなふりをしていた。

演奏会に先立ち、ロミーが「人前で弾く前に、一度、知り合いのピアノの教授に聴いてもらってはどうか」というので、それはいい考えだと思い、彼女に頼んでフランクフルト音楽大学のフォルクマン教授に連絡をとってもらい、ピアノのレッスンを受けることにした。

電車でフォルクマン教授の家のあるクロンベルクの駅についたら、小雨の降る中、一つの傘の中に入った3人の小さな子供が寄ってきて、「マリコさんですか」ときく。お父さんに言われて迎えにきたのだ、という。何と暖かい雰囲気だろう、と嬉しくなった。

その暖かい雰囲気はそのまま、フォルクマン先生の授業の雰囲気であり、レッスンは本当に素晴らしかった。ピアノを習うとはこういう事が、と思った。習った曲はショパンのアンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ。授業料は日本では考えられないくらいに安かったのだが、それでもとても申し訳なさそうに受け取られた。

レッスンのあと、また来てもいいかと聞いたら、承諾してくださったので、演奏会の直前にもう一度レッスンを受けにいった。二回目のレッスンの際には、前に教わった事を十分に自分のものにしていたので、先生は私の上達ぶりに感心されたらしく、「ブラヴォー」と褒めてくださった。

この演奏会はかなりの成功をおさめ、ドット教授は非常に喜んでくださった。またジュードドイッチェツアイトウングに大変良い新聞批評が出、私はとても嬉しくてこの新聞批評をフォルクマン先生に見ていただいた。

演奏会のあと間もなく、日本に帰ることになった。フンボルト奨学金は全部で2年間もらえるので、まだ8ヶ月分程残っていたが、全部をぶっ続けでもらうのでなく、一部残しておいて、再度渡独する際につかうのがいい、と、多くの人が考えていたので、私もそのやり方を選んだのだ。そうすれば、いつでも好きな時に、ビザの心配なく再び渡独できるからだ。

私はもうこの時、次に来た時には永住することになるかもしれない、と予感していた。

### 第三章

日本では再び京大医学部眼科学教室での助手生活になった。私の所属する電気生理の研究室には、本田先生のもと、ドイツに行く前からいた根木君と河野君がいて、また電顕の研究室には友人の松村美代さんがいて和気藹々としていたし、その他にも眼科研究室の住人は数が増え、活気に満ちていて、眼科研究棟の老朽してお化けの出てきそうな雰囲気にもかかわらず、そこでの毎日は楽しかった。

しかし臨床のほうは、手術を長くやっていない間に、他の人たちは進歩を遂げていて、私はひどく取り残されていたので、あわてた。白内障手術は、このころ画期的な進歩を遂げ、眼内レンズの挿入を可能にする嚢外摘出術が主流になり、それまで行われていた嚢内摘出術は、殆ど行われなくなっていたが、私が習ったのは嚢内摘出術だった為、技術的には遥かに難しい嚢外摘出術を新たに学ばないといけなくなったのだ。それで、後輩の石岡岡君に頼んで、週に一回アルバイト医として派遣されていた某病院で、教えてもらったりした。京大病院では、既に助手である者が、研修医のように一から教えてもらうわけにはいかなかったからだ。しかし、技術的なギャップはかなり大きく、そう簡単に取り戻せそうではなかった。

フォルクマン教授の授業の素晴らしさは忘れ難く、どうかして彼のもとでじっくり学びたいものだ、という考えが、ずっと頭のなかにあった。フランクフルトの音大に入ってはどうかろう、先生があんなに感心してくださったのだから、もしかしたら可能かもしれない、と思い、「先生のもとでピアノを学びたい、そのためには、医学を中断してもいいと思っている。」という内容の手紙を書いた。

すると返事が来て、「貴方のピアノの腕は確かに素晴らしい、ピアノを弾く医者、としては間違いなく世界一だろと思うけれど、音楽の世界は競争があまりにも激しく、医者のような立派な職業を持つ人におすすめできるものではない。しかし、それでもいい、というなら、自分は止めない」と書いてあった。小さい時から、本当にやりたかったことを試してみる、二度とは来ないチャンスだ。医者としての自分に100パーセントの自信を持ってない今、音楽でどこまで出来るか、それにかけてみよう、と決心した。

この年の祇園祭の宵山に、丁度留学して京大眼科に来ておられた中国人の先生を案内し、同僚と連れ立ってでかけた。祇園祭は、いつも暑い盛りで、人ごみの中で大変な思いをするから、大学一年生の時以来、行ったことがなく、また行きたいとも思わなかったのだが、「もしかしたら、もう今後見られないかもしれない」と思うと、その、日本ならではの、京都ならではの、の雰囲気感無量だった。それまで気にもとめず、あたりまえだと思っていた、こういった行事が、とても素晴らしいものに思えた。

そして1年後、京大病院を退職し、再度ドイツに渡った。

#### 第四章

ドット教授に、フンボルト奨学生としての期間が済み次第、音楽を勉強するつもりであることを告げたところ、「貴方はとても勇敢な人だ」と言われ、協力を約束してくださった。これはちょっと、日本では考えられない状況だ。今までさんざんにドイツの奨学金をつかって医学研究をやってきたのに、それを放り出すというのだから、「恩知らず」だと言われても仕方が無いところなのに、何と言う寛大さであろうか。私はかなり驚きつつも、彼の好意に甘えることにした。余談になるが、この時からかなり後、私がもう音楽学生をしていたころだと思うが、ドット先生のところに誰か医学関係の客が来ていた時、依頼されてピアノを弾いた。すると、ドット先生がその客に、「これを聴けば、誰だって（私が医者をして止めてピアニストになりたいと思う事が）理解できるではないか。」と話されていたことがあった。そういうわけで、医学研究は続けながらも、音大の入試の準備にとりかかった。フォルクマン先生と相談し、バッハの平均率から2巻の変口短調、ベートーヴェンのワルトシュタイン、ショパンの舟歌、それにストラヴィンスキーのペトルーシュカから終楽章、を準備することに決めた。ペトルーシュカは難しいので有名だが、以前日本でマックス・エッガー先生のレッスンの際に弾いたら、大変感心され、その日の授業料を受け取られなかった、というくらい得意な曲だ。

フォルクマン先生のレッスンはいつも素晴らしくて、バッハの弾き方など、目から鱗が落ちるようだった。的確なアドバイスはこれほどにも役に立つのかと驚くほど、短期間に上達し、先生の方も私の上達の速さにびっくりしておられたらしい。入試の準備を始めた最初のころは、他の音楽大学をかけたもち受験するように、と言われていたのだが、入試が近づいてきたころには、「間違いなく合格するから心配いらない」と言われるようになった。時にはアップライトでない、ちゃんとしたグランドピアノで練習できるようにと、音大の門衛さんに話をつけてくださったりもした。

そんな風に、実際的にも心理的にも助けてくださったので、緊張はしても非常に充実した気分を受験に望めた。試験時間は1人約20分で、最初に弾く曲は自分で選び、その後は審査員の言われるとおりに、弾いたり止めたりする、というのが試験のやり方だった。

私はバッハから弾き始めた。ホールのスタンウェイのコンサート・グランドは大変弾き易く、思い通りに音色の調節ができるので、緊張しているはずなのに弾いていて気持ちがよかった。大抵の人はすぐ途中で止められていたので、どこで切られるのだろう、と思いながら弾いていたが、平均率の中では一番長い曲のひとつなのに、フーガの終わりまで全部弾かされた。すると、「ああ、どうやらみな喜んで聴いてくれているようだ」と思い、緊張が一拳に解け、つぎのベートーヴェンは実にのびのびと弾けた。1楽章の提示部だけで止められたあと、先生方が「次はどれにしよう、まだ『舟歌』と『ペトルーシュカ』があるが」と相談されていたが、そのうち、一人の先生が（この人は後になって、有名なピアニストのホカンソンだと分かった）「ペトルーシュカ」と叫ばれた。それも終わりまで全部弾いた。他の人と比べると随分長い試験だったと思う。

弾き終わったあと、ホールの外に出たら、そこで待っている受験生の一人、韓国人らしい女の子が「あんた、すごくうまいねえ」と言ってくれた。しばらくしたら、フォルクマン先生が「よくやった、よくやった」と言いながら出てこられたので、「あの一、試験の結果はどうなのでしょうか」と聞いたら、「何を言うのですか、勿論合格ですよ。」とおっしゃった。審査員の一人だった別の若い先生も出てきて、「grossartig!」(素晴らしかった)と褒めてくださった。

ピアノ以外に、音楽理論の試験もあったが、これは事前に「この本で準備すること」と言われていたグラープナーの本をちゃんと読んであったから、とても簡単で問題なかった。かくして、私は35歳という、異例に高齢なピアノ学生となった。この点では、私は極めて幸運だったのだ。ミュンヘンやケルン等、有名な音楽大学の多くは、厳しい年齢制限があったし、フランクフルトでも、年齢制限をつける話は当時進行中だったのだそうで、その翌年からは、30歳以下、という制限がつけられた。私は文字通り、滑り込んだのだ。すぐさま、フォルクマン先生と相談して今後の予定を立て、まず、ブラームスの「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」を練習する、と決めた。

## 第五章

フランクフルト音大の学生になって最初の1年間は、ドット先生のはからいにより、マックスプランク研究所の奨学金を半分だけ貰い、週に3日研究を続け、あとの日は音楽に、ということにした。もっとも毎日夕方には練習できるわけだから、練習量はそれで充分だった。それ以降は奨学金が無くなったが、音大の授業料は外国人でもタダであり、また練習は音大で出来るので、フランクフルト近郊に住む日本人子女にピアノを教えるアルバイトをすれば何とかやっていけた。

今まで音楽学校に通ったことの無い私は、日本の大学で既に履修し、副科を免除される他の日本人留学生とちがって、音楽史、音楽理論、聴音といった科目もやらないといけなかったが、全て面白くて熱心に授業に出席した。聴音は絶対音感のある私にとっては非常に簡単なものだったが、音楽史はそうでもなく、一番前に座って、聞き取れるかぎり在必死でノートに書いた。音楽理論は、フォルクマン先生のはからいで、私だけは特別に、クラインという年取った作曲家の個人教授を受けた。ほかのピアノ科の学生は若い先生のもとで集団授業を受けていたから、私はかなり恵まれた待遇を受けたと言える。フーガの作曲法まで徹底的に習った。

しかし何と言っても一番面白かったのはピアノの授業だった。毎週レッスンを受ける事は子供の時以来なかったし、昔習っていた時でも、ひとつひとつの箇所が完璧に美しく響くようになるまで指使いを工夫し、困難な箇所の練習の仕方を教わって試みしてみる、などといった徹底的な習い方をしたことはなかった。また、強弱、ルバートなど音楽的解釈についても、何故そうでないといけないか、と理論的に説明を受けた事は一度も無く、楽譜に明記されている事以外はすべて自分の感覚にたよって演奏していた。私の今までのピアノの先生は、最初がカナダ人のカトリックのシスターで、この方は自分ではあまりピアノを弾かれなかったが、幼児の手ほどきには非常に優れておられ、そのおかげか、私は譜面を読む苦勞をしたことがなく、大抵の曲は初見で弾ける、という特殊技能を身につけた。この先生に中学生になるまで習い、次についた物部一郎先生は作曲家だったから、普通のピアノの先生には医学生になるまでついていたことがなかった。医学生になってから、藤村るり子先生とマックス・エッガー先生に時折レッスンしていただいたが、その時も、自分で練習しておいた曲を聴いていただいて部分的に手直ししてもらい、というだけで、弾き方については特に教わった事がなかった。そういうわけで、私はこの時に至るまで「ピアノのテクニック」についてはろくろく習ったことがなく、殆どが自己流だったのだ。

ある日、レッスンの最中に、フォルクマン先生が私の弾いている手をじっと見つめながら、「貴方の弾き方は実に変わっている。手首を全く使わないで、指だけで弾いている。そんな間違った弾き方でも、才能があればちゃんと弾けるのだなあ。」と感心するように言われた。

そう言えば、私は子供のころから手首の運動が苦手で、ボール投げなど、前向きに投げたつもりでも後ろ向きに飛んでしまうといった風だった。手首を動かす筋肉が先天的に一部

欠けている、としか思えなかった。それでも一応ちゃんとピアノが弾けるのは、小さい頃からいつも非常に難しい曲を弾きたくて、何とか弾けるようにと自分で工夫をこらし、他の筋肉の運動でカバーする方法を身につけていたからに違いない。そういう変わった弾き方だから、通常のピアノの先生なら「こんな弾き方ではだめです」と、それを矯正する練習ばかりやらされ、そのためピアノを弾く喜びが無くなってしまったかもしれないが、幸い、私の昔の先生方はピアノのテクニクについて関心の無い人達だったから、自分のやり方で通ってきたのだと思う。

フォルクマン先生が「貴方の指の動きはたいしたものだが、少しは手首の動きで指を助けることが出来たら、もっと楽になるだろう。ちょっとこうやって動かしてみなさい」と両手首をブラブラと速く回転してみせられたので、私も真似てやってみた。すると、ゆっくりしか出来ない。先生の半分くらいの速度だ。「え、そんなにゆっくりしか出来ないのか、」と驚いておられる所へ、丁度門衛さんが何かの用事で入ってきた。「君、ちょっと見てみなさい。私の手の動きと、彼女の手の動きと、どう違うかね。」と聞かれると、門衛さんは、「はい、教授の手の動きの方がずっと速いです。」と、さすがは教授、と感心しているように答えたので、私と先生は大笑いした。

このように、先生に技術上の欠点を指摘されても、それでもって全体を否定される事はないので、意気消沈しないで練習に励むことができた。私の手首の欠点は、完全に直りはしなかったが、それを知って意識的に演奏法を工夫することにより、多くの技術的問題点を解決できた。こういう事は、ある程度年を取った者はよく心得ておくべき事だ。子供のときと違って、35歳とまでいかななくても、もう体の出来上がっている大人が、しゃにむに練習したからといって、それまで出来なかったことを何でも出来るようになるものではない。それをよく弁えずに無理な練習を続ければ、指を壊した為にピアニストになるのを諦めないといけなかったロベルト・シューマンのように、不可逆的な損傷をきたす恐れがある。現に、そういう人達を私は何人も知っている。シューマンには作曲の才があったから、彼の指の故障は後世の人々には幸いだったと言えようが、大抵の場合は、それがもとで音楽の道を諦めないといけなくなってしまう。本当にいい先生は、音楽的な面を教えるのは勿論のこと、技術的な面では、生徒一人一人の特性を掴み、それに合わせた教え方をしてくれるものだ、という事がフォルクマン先生の授業でわかった。

前に述べたように、私のそれまでの演奏は殆どが自己流だったから、そういう風に教わるのが不思議な気分で、自分は競馬ウマで、先生は調教師であるような気がした。速く走れるかどうかは、ウマの先天的な素質にかかっているが、そのウマの素質を十分に引き出すのは調教師だからだ。

ブラームスのピアノ曲は今までとっつきにくかったのだが、こうして習ったおかげで大好きになり、「ヘンデル変奏曲」は私の最重要レパートリーのひとつになった。この年の秋に学内演奏会でこれを演奏したところ、大成功を収め、フランクフルター・アルゲマイネという新聞でも好評を得た。

この時、同じ演奏会に出ていたもう一人のピアノ学生のバルバラは、シューマンのソナタで酷評され、「ブラームスとは天と地の違い」とまで書かれていたので、なんと気の毒に、さぞ気分が悪かろう、と思っていたら、次に会ったとき「貴方の演奏は本当に素晴らしかった」と心から褒めてくれたので、彼女の人柄のよさに感心した。日本ではあまりそんな経験をしたことがない。人前で上手く弾いたら、誰か彼かに妬まれていやな思いをする事が多かったように思う。

このあとにも何回か、ドイツ人の心のひろさ、というか、他人の長所を妬まずに素直に認めることができる、という美点を見る機会があった。その一例だが、ブラームスを弾いてしばらくした頃、フォルクマン先生が作曲された「童謡を主題とした変奏曲」の演奏会があり、そのソリストに選ばれた。この「変奏曲」はバロックから現代にいたる色々な作曲家のスタイルをまねて作った非常に大掛かりなもので、ピアノソロ、ピアノ伴奏つき歌曲のみならず、例えばショパンやリスト、ドビュッシー、バルトークなどはオーケストラつきの協奏曲として作曲され、効果万点、非常に面白いものであった。4回にわたって色々な大会場で演奏され、聴衆も総計すれば数千人に至った。当然、このピアノは誰でもやりたかったに違いない。後になって分かったことだが、実は私より早くから、同僚で1年先輩にあたるマティアス・フックスが練習していたのだが、私のほうが向いている、と先生が判断されたので私にまわってきたのだ。マティアスは非常に優秀なピアニストだったし、腹をたてても不思議はないのだが、彼は終始極めて友好的で、妬むというような素振りは全く無かった。ある時学内演奏会で彼が演奏したショパンの24のプレリュードは、私がそれまで聴いたこともないくらい完璧でしかも情感のあふれたものだったので、なぜ、私が彼に取って代わることができたのか不思議だった。

音大ではその後、ベートーヴェンのピアノ協奏曲を5曲全部習い、シューマンの謝肉祭、幻想曲、ショパンのポロネーズ、バラード、ソナタなどなど、クラシックとロマン派を中心に数え切れない曲目でレッスンを受け、私のレパートリーは確実に大きくなっていった。ただし先生は現代曲がお好きでなく、そんなものをレッスンに持って行っても、ただ聴いてもらうだけでさほど勉強にならないので、あまりやらなかった。

ある時、「ラヴェルの夜のガスパールを弾いてもいいですか、」と聞くと、「勿論いいですよ、やりなさい」と言われたので、次の週に持っていった。これは先生の得意分野ではなかったはずだが、レッスンの前に部屋の外で耳をすますと、中から一楽章の「オンディーヌ」が実に美しく聞こえてくる。どうしたことか、他の人はこの曲をやっていなかったと思うのに、と部屋を覗いたら、先生が自分で弾いておられた。十分な授業ができるように、と練習しておられたのだ。全く先生の鑑のような方だった。

音大に入ってしばらくしたころ、先生が「ヴァイオリンの学生が伴奏者を探している。一緒に弾いてみては、」と、エジプト人の優秀な学生、バスマを紹介してくださったので、彼女と一緒にバルトークのラブソディー2番を練習し、ヴァイオリンの授業と一緒に行き、学内のコンサートで演奏した。

それからしばらくして、音楽史の授業を一緒に受けていたチューバの学生、ベルンハルトが、リヒアルト・シュトラウスのホルン協奏曲を伴奏してくれないか、と私にきいてきた。面白そうだからすぐオーケーし、一緒に練習した。チューバはホルンより音域が低いので、オリジナルより1オクターブ低い演奏だ。2人で室内楽のライナー・ホフマン教授のレッスンを受けに行った。

このころ室内楽はピアノ科学生の必修科目ではなく、やるかやらないかは学生の自由意志にまかされていて、ホフマン教授のレッスンを受けたいグループがあれば、直接頼みに行き、レッスンの日取りをきめていた。その弊害で、ピアノ科の学生の中には、ソロだけで手一杯だから、と一切室内楽をやらず、卒業試験の直前になってから、その試験に必要な最小限度、1曲だけをこなす、という人が結構沢山いた。そのため、ピアノ以外の楽器の学生は、伴奏者を見つけるのに四苦八苦していた。トランペットの先生が「伴奏者が欲しかったらピアノ科に彼女を見つけるのだ、それしか手は無い」と言っていたことがある。ホフマン教授に初めて会ったのは、このようにチューバによるシュトラウスのホルン協奏曲の伴奏をした時だったが、先生は最初から大変私のことを気にいってくださった。今まで京大音楽研究会などでさんざんに伴奏していて、人に合わせて弾くのが得意だったからだろう。「年は」ときかれたので、「年とっているのです。35です」と答えたら、「35歳の方が20歳の人のような演奏をすれば年とっていることになるけれど、35歳の演奏をするのだったら問題無いです。」と言われた。

チューバによるホルン協奏曲はかなりの成功をおさめ、学内、学外で演奏会に出たのみならず、フランクフルト音大の代表としてラジオにも出演した。余談になるが、このとき一緒に弾いたベルンハルトは、なかなかハンサムで体格もよく、真面目ないい青年だったが、卒業後あるキリスト教のセクトに属する女性と結婚してその集団に加わり、一般社会から逃避した生活を始めて、チューバはやめてしまったのだそうだ。

私は人と共演するのが好きだったし、頼まれればすぐホイホイと伴奏したので、瞬く間に学校中で知れ渡ったらしく、次々と依頼がきて、そのたびにホフマン先生の所に行ったから、時には同じ日に何回も相手を変えて授業に行ったこともあり、先生に「君は連続演奏者だねえ」と笑われた。先生には、室内楽、歌曲伴奏、それにホルン協奏曲のようなオーケストラ・パートの演奏まで、非常に多くの分野で習うことができた。

日本人学生2人と一緒にブラームスのホルン・トリオを練習し、レッスンに持っていったことがある。そしたら先生は、「あとの2人(ヴァイオリンとホルン)はマリコを真似て弾くように。日本人は、自分の知っている限り、ロマン派音楽を感覚的には理解できないのだが、マリコだけは別だ。何故だかわからない。」とおっしゃった。

ある時、音楽教育課程で勉強している、あまり優秀ではないが、人付き合いがよくて人気のあるミヒヤエルが、「マリコ、喜び(ドイツ語でフロイデ)を得たかったら、ボクに言ってくれたまえ。」と言う。私はさっぱり訳がわからず、友人で京都出身のオルガン科の真奈さんに、「彼が、こんな事言うてるけど、どーいう意味やと思う?」と聞いた。「なんやそ

れ？」と彼女も言って2人で顔を見合わせているうちに、両方とも同じ考えにいきあたった。大笑いして、それ以来、彼に「フロイデマン」というあだ名をつけた。ずっと年上の私にそんな提案をしてくるのは、きっと若く見られているからだ、と気をよくし、彼には「ちゃんとボーイフレンドがいますから」と郑重にお断りした。

たいていのピアノコンクールには28歳以下とか30歳以下とかの年齢制限があって、私は参加できなかったが、ある時、学校でスペインのハエンという所であるコンクールのパンフレットを見つけ、年齢制限については書いてなかったので、受けることにした。ワルトシュタイン、ヘンデル変奏曲、夜のガスパール、ペトルーシュカといった得意の曲目の他に、ショパンのエチュード2曲、規定されていたアルベニスの「イベリア」から1曲を選んだ。

準備万端ととのえて、コンクールに臨み、一次審査ではペトルーシュカを弾いてクリアした。2次はクラシックのソナタを弾かねばならないが、これはドイツものだから、強いつもりだった。ところが、自分としては満足な演奏をしたにもかかわらず、何故だか、私から見たらソナタの弾き方としては邪道だと思えるような演奏をしたフランス人、スペイン人といった人達が本選に進み、自分自身は落ちてしまったので、そんなばかな、と怒りのあまり、夜中に激しい腹痛になって、同じ部屋に寝ていたドイツ人に「正露丸」をもらって呑む羽目になった（このドイツ人の夫が日本人で、彼女は正露丸を持ち歩いていたのだ）。国際コンクールでは、こういった「好みのちがい」がよくあるものだ、とはもっと後になってから分かったが、この時はひたすら腹がたっていた。

コンクールのあと、マドリッドにでて、街をぶらぶら歩き回っていたら、向こうから、長らく会っていなかった弟の俊児と奥さんの有理さんが赤ん坊の長男、幸太郎の乳母車を押しながらやってくるのに出会って、びっくり仰天した。当時アメリカ留学中だった眼科医の弟が、このころにスペインで学会に出席する、と聞いてはいたが、この日に落ち合う約束などしていなかったし、マドリッドでばったり出会うなんて、まったく世界は狭いものだ。一緒に弟たちの滞在しているホテルへ行って、コンクールでの鬱憤をぶちまけた所、弟が、「まあ、一次に合格したというんやから、（国際コンクールを）受けられへん程下手やない、という事やな」と言うので、それもそうだ、それが分かっただけでもいいや、と思うことにした。

このしばらく後で、オーストリアのザルツブルクでモーツァルト・コンクールに出る機会があった。何故だか、参加資格に年齢制限がついていなかった。1次はケツフェル300台の中期のソナタとバッハの平均率、2次は後期のソナタとショパンのエチュード、3次は前期のソナタ、決勝はピアノコンチェルト、という規定だった。

参加者は60人くらいで、その内約3分の1が日本人、あと韓国人も多くいたから、全体の半分は東洋人だった。

このコンクールは、そもそも最初から変だった。会場についたら、いたる所で、日本人のグループが金魚のうんこみたいに審査員について歩いているのが見かけられたのだ。なん

だか一昔前の日本のような感じだった。

一次審査は2日にわたって行われ、私の出番はおおよそ真ん中、2日目の最初から2番目だった。1日目は練習していたので会場には殆ど行かず、演奏を聴かなかったのだが、夕方、同じ部屋に泊まっている青木さんという人が、「自分は絶対うまく弾いたのに落とされた。納得がいかない。選び方に不正があると思う。」と言うので、「それなら、明日、私が弾いたあとは、全部聴いて、自分達で採点して、結果とくらべてみようよ。」と提案した。彼女と、もう一人同じ部屋にいた韓国人の王さん（彼女は私の少し後で弾くことになっていた）と3人で、翌日、一次審査の後半は、自分達の出番が終わったら会場に座って全部聴き、採点した。

私の演奏は自分としては満足な出来だったし、青木さんも「素晴らしかった、おめでとう。」と褒めてくれた。しばらく後で、ある日本人の若い女性が、非常に上がっているのか、音が十分に鳴らず強弱など殆どなくただ指を動かしているだけ、といった極めて拙い演奏をした後に、私たちの前の列に座った。日本人の友人2人と一緒だった。彼女は席につきながら、「あれ、一体何よ」と自分の演奏のまずさにしょげているので、「ちょっと緊張しちゃったねえ、でもまあ、なんとかあったじゃない。」と、私はおせっかいにも彼女の友人に加わって慰めた。そのまたしばらく後で、王さんがやわらかい音で美しい演奏をしたので、私は友人になったばかりの彼女が上手く弾いたのが嬉しくて、つい、「この子、上手いねえ」と声を出して言ったら、前に座っていた3人が一斉に振り返り、ものすごく悪意に満ちた目つきで私を睨んだので、びっくり仰天した。何か悪い事を言ったかしら、と考えたけど、思いあたらない。どうやら「他の人を褒めるなんて許せない。」という感覚らしい。

あるヨーロッパ人の女性が有名なトルコ行進曲つきのソナタを弾いた。この曲は一楽章が変奏曲になっていて、いたるところに繰り返しがあり、彼女は全部の繰り返しをしながら弾いていたところ、審査員席から「繰り返しをしないように」との声が響いた。それでも、くせがついているらしく、また繰り返しをしてしまったら、今度は大声で「繰り返しをやめろ！」と怒鳴るので、聞いていた私達はいたたまれない気分になり、彼女をととも気の毒に思った。

その日の約30人が全員弾き終わったあとしばらくして、合格者の発表があった。私達3人は、早速自分達の採点と見比べた。すると、信じられないようなことが明らかになった。ヨーロッパ人らしき名前の参加者については、私達の採点で上位だった人が順当に合格していたのに対し、アジア人に関しては、採点とは殆ど無関係の選び方だった。私も王さんも落ちていた。青木さんはそれを見ながら、「やっぱりねえ、あなたの演奏は、ちょっとはっとする所のある演奏やったから、落とされるんやないか、と実は心配してたんや。」と言った。そこへ、会場で私達の前に座っていた女性が来たので、「残念だったねえ。」とよく確かめないで言った。その人の演奏はあまりにひどかったので、合格するはずはない、とはなから思っていたからだ。ところが彼女は、むっとした表情で、しかし勝ち誇ったかのように「私、通ったのよ」と言ったので、驚きのあまり返す言葉がなかった。

こんな気分の悪い場所にはそれ以上いたくないから、コンクールの続きは聴かず、ザルツブルク観光もせず、さっさと帰途についた。それから3ヶ月くらい経ったころ、私のもとに「入賞者演奏会」のレコードが送られてきた。それによると、1位になったのは35歳のオーストリア女性で、あの「トルコ行進曲つき」を繰り返ししながら弾いた人だ。この人を一位にする、と最初から決めてあったコンクールだったらしい。それゆえ、年齢制限もなかったし、また、子飼いの弟子だから、あのように会場で怒鳴ったりもしたのだ。彼女を気の毒に思った私がお人よしだったわけだ。腹が立つ、というより、あきれ返る、という感じで、そのレコードは「あのコンクールのやりかたに同意できないから、こんな物はいりません。」と書いた手紙をつけて送り返した。

フランクフルト音大でこの話をしたら、自分も同じような目にあった、という日本人がいた。声楽で、のちある有名音楽大学の教授になった女性は、やはりオーストリアはウィーンのフーゴ・ヴォルフ・コンクールで同様の腹立たしい経験をし、入賞者演奏会の際に友人とともに「ブー」(引込め!)と叫んだのだそうだ。そしてまた別の女性は、フランクフルトで師事していたエリザベート・グリュンマーという先生がご病気の為、教えてもらえなくなったので、バッハのマタイ受難曲のエヴァンゲリストとして有名な某テノール歌手に師事したいと思ってオーストリアまで行ったところ、彼は彼女の歌など一切聴こうとせず、「貴方は授業料をいくら払えますか」とだけきかれ、驚きあきれて逃げ帰ってきた、と言っていた。オーストリアがどこでもこの様なのかどうかは知らないが、非常に悪い印象が頭にしみついてしまった。

このようにソロのピアノコンクールでは不振だった私だが、時にはいいこともあるものだ。音大に入学直後、一緒に弾いたヴァイオリニスト、バスマの夫がチェリストで、やはりエジプト人だが、専攻科の優秀な学生だった。このカーメルとデュオを組んで、イタリアはシチリア、トラパニの室内楽コンクールを受けた。このコンクールは室内楽なら何でも参加できるので、全部で90組ほどの出場者だったが、様々な楽器の編成によるデュオあり、トリオあり、カルテットあり、中には聞いたこともない民族楽器の出演もあって、バラエティーに富んでおり、聴き手にとって極めて面白いものだった。非常に小さな、笹笛のような楽器とピアノのデュオがあり、笛の奏者はなかなかの名手だったが、この笛は音程の調節が出来ないらしく、吹き始めた時には正しい音程だったのに、終わりかけには約半音もピアノより高くなっていたので、聴き手は耳をおさえてこらえていた。

このコンクールではどうやら審査員の好み私達に有利にはたらいたらしい。一次予選に演奏したブラームスのチェロソナタ1番の第3楽章(フーガ)で、カーメルが「気分に乗るすぎて」予定外の大テンポ・ルバート(意図的に音を引き伸ばしたり短縮したりする音楽表現技巧)をしたために、ピアノとチェロがずれてしまって、そのまま1ページくらいずれたままで弾き続けた。独奏なら本番でいつもと違った事をして大丈夫だが、室内楽の場合はそうはいかない。一人が予定外のことをすれば、合わなくなってしまう。一時的に合わなくなっても、大抵は簡単に修復できるのだが、フーガはややこしいので、チェロ

が弾いている部分を見つけるのに時間がかかったのだ。2人ともすっかり落胆し、これでは絶対駄目だ、もう落ちた、と思っていたが、どういうわけか合格した。二次予選はベートーヴェンのソナタ第5番とドビュッシーで難なく通過したが、三次の本選会の際、ラフマニノフのチェロソナタの第2楽章(スケルツォ)を、ものすごい勢いで弾き始め、しばらくしてはっと気がついたらチェロが聞こえてこない。これは一体どうした事かとチェロの方を見たら、カーメルが、演奏するかわりに、2メートルばかり前に落ちた弓を睨んでいる。勢い込んだあまりに弓を投げ飛ばしてしまったのだ。仕方なく一旦演奏を中断し、弓を拾い上げてまた始めからやり直した。そんなわけで、これではいよいよ駄目だ、入賞なんてありえない、と思っていたが、結果は3位入賞だった。きつねにつままれたような気分にいる所へ、審査員の一人がやってきて、「貴方達の演奏は非常に良かったが、ハプニングがありすぎたから、これ以上、上位には出来なかった」と言うので、私達は2人とも恐縮し、「いえ、これで充分です。」と答えた。

翌年、1986年2月にはバスマとカーメルの出身地、エジプトに演奏旅行した。バスマの母親が文化関係の有力な政治家だったので、この母親がエジプト日本大使館と交渉し、大使館が私を招いてくれたのだ。おかげで大使館員の行き届いた世話つきの、極めて快適な旅行だった。ソロと、デュオとトリオの演奏会の合間には、ピラミッドなどの観光をさせてもらったし、また夜にはキャバレーで本場の素晴らしいベリーダンスを見る機会もあった。もっとも、バスマはベリーダンスを国辱と思っているようだった。女性を性的な娯楽品として扱っている、という感じがするからだろう。そう言えば、エジプトはイスラム教国なのだが、彼女の母親のように、政治的な面をはじめ、色んな分野で高い地位にしている女性の数は、日本と比べ物にならず多いように思えた。行く先々で、男に命令している威厳のある女性に出くわした。

この楽しい旅行にも、ひとつ欠点があった。それは、エジプト人が時間にルーズなことだ。カーメルやバスマと練習のために待ち合わせしても、時間どおりに来ることは1度もない。フランクフルトでも、時々は頭にきたが、エジプトでは他の人もみなそうだから、そのルーズさは輪を掛けたひどさだった。ある時、カイロの音大の前でカーメルと待ち合わせた。約束時間を2時間すぎても、まだ現れない。いらいらして、門衛さんに「2時間も待ったけど来ないから、もう帰ろうと思う。」と言ったら、「え、どうして?そのうち来るよ。」と、私がいらいらしているのが全く理解出来ない様子だ。仕方なくもう1時間待ったところ、カーメルが至極上機嫌な様子であらわれた。腹は立ったが、そこでは怒るほうが場違いなので、「郷に入れば郷に従え」と自分に言いかけ、ぐっとこらえて機嫌の良さそうなふりをした。ある日、日本大使館で各国の外交官を招いてのパーティーがあったが、招かれた客があと全員そろっているのに、主賓とも言うべき、エジプト人のバスマの両親が遅れて来て、大使館員をはらはらさせた。それを見ながら、私は心の中で「やっぱり」とほくそ笑んだ。

1986年の夏、卒業試験を受けた。通常は5年勉強することになっているが、私は年を

取っているから自分で超特急の3年半に短縮したのだ。副科の試験はその前の学期に全部済ませた。一次試験は演奏会形式で行われ、スカルラッティ、ハイドン、ラヴェルなどのソロを弾いた後に、ブラームスのピアノ協奏曲2番をフォルクマン先生の伴奏で全曲弾く、というハードなプログラムで、音楽理論を習ったクライン先生の作曲されたトッカータの初演もこの時に行った。二次試験は、先もって出してあったレパートリーのリストから選ばれた、ショパンのソナタや室内楽のラフマニノフを弾くほかに、試験開始の3時間前にわたされた曲を演奏する、という課題と初見演奏があり、これらは私の得意分野だ。最優秀を獲得し、専攻科に進んだ。

## 第六章

専攻科といっても、特に変わったことをするわけではない。音楽理論など、副科の授業が無くなる、というだけのことで、ピアノや室内楽は今までどおりだ。

バスマの提案で、ピアノトリオで室内楽コンクールに出ようじゃないか、ということになり、練習を始めた。彼女は明らかに、カーメルと私が賞をもらったことをうらやんでいて、自分も入賞者になりたかったらしい。しかし、練習は困難を極めた。まず、バスマのヴァイオリンは、音大の学生としては優秀だったが、あとの2人より技術的に弱く、彼女のせいで演奏が上手いかないことはしょっちゅうだった。だが彼女はなにしろ名家出身の言わばお姫様なので、夫のカーメルは常に尻にしかれている状態だったから、彼が彼女に注意する事は皆無。私も人に注意するのが苦手なので、畢竟彼女の独壇場となり、彼女が間違っても、いつも私がカーメルのせいにされ、すると私達もだんだん腹がたってきてやる気がなくなる、というようなことの繰り返しになった。それに加え、例のルーズな時間感覚のため、二人でいつも約束時間より大きく遅れてきては、そのたびに遅れたことを小さな息子のせいにするので、私としては文句のいい様がなく、ただ怒りをおさえるのみだった。練習時間はそのため短くなり、コンクールの日が近づいてきても、十分に準備できていなかったで、結局出場はとりやめた。

しかし苦勞して練習したのは全くの無駄にはならず、いくらかのレパートリーは出来たから、それを持ってアメリカはフロリダに演奏旅行することになった。そちらにバスマの親戚がいたからだ。

丁度このころドイツでは、サルマン・ラシュディーが「悪魔の詩」を書いたことによりイランで死刑の宣告を受け、刺客をおそれてロンドンで地下生活を始めた、という話題でもちきりだった。アメリカ行きの飛行機の中でそのニュースをしていたから、私もその話題であとの2人に話かけたら、彼らは表情をこわばらせて返事しない。はっとした。イスラム教の人の考えは私達とは違うのだ、この話題は避けなければ、と気がついた。

初めてのアメリカは、公共輸送機関の不全さゆえに、かなり不自由なものだった。日本大使館の助けもないし、あとの2人は親戚の家に泊まっているので、私は1人で行動しなければならず、レンタカーを運転してどこかへ行こう、というほどの熱意もないので、練習と演奏会以外はほとんど泊めてもらっていた家に閉じこもりきりだった。1度だけ、家のおばさんの息子にたのんで、オランダのブッシュ・ガーデンズに連れて行ってもらったが、スケールの大きな遊園地、というだけで、どうしても見る価値がある、という程のものでは無かった。

このあとしばらくして、バスマとカーメルが両方ともフランクフルトオペラオーケストラの入団試験に合格した。すると、もともとあまり勤勉ではない彼らのこと、オーケストラでの任務をこなすのが精一杯になり、とてもトリオどころではなくなったので、トリオは自然消滅の憂き目を見た。

そこへ、フランクフルト音大でヴァイオリンを勉強した後、マンハイムのオーケストラで

弾いているミヒヤエルが、彼の友人でまだオーケストラに入れずぶらぶらしていたチェリストのマルティンと一緒にトリオを弾こう、と声をかけてきたので、丁度相手はいないところだし、よく考えないで承諾した。

この2人は、前のパートナーと違って極めて勤勉で、合わせのときには何時も私より早く来て2人で練習していたし、また申し分なく性格のいい人たちだったから、最初は私も喜んでいました。

ところがだんだんに、彼らは私のパートナーとしては音楽的に不十分であることが明らかになってきた。一緒に有名なボ・ザール・トリオのピアニスト、プレスラーの講習会を受けにいった事があるが、先生の私に対する態度と、あとの2人に対する態度が大きくちがっていたりすることから、先生が「このピアニストは、何故こんな下手なやつらと弾いているのだろう」と思っているらしいことがありありと感じられた。

ある時、ホフマン先生がはっきり「あの2人と弾いていても、素晴らしいトリオになる見込みはない」と言われたことで私も決心し、彼らに、これ以上続けられないと伝えた。勿論、貴方達は下手くそだから、などとは言わず、今はソロに打ち込みたいから、という風な理由をつけたけれど、彼らは想像がついただろう。とてもいい人達だったし、一緒に練習するのは楽しかったので、この別れは実のところつらかった。共有していた楽譜を、持ち主を決めて取り分ける際など、本当に悲しくて、涙が出そうだった。でも、このまま続けている限り、自分に見合った共演者を見つけることは出来ないし、仕方がないことだった。室内楽の一番の難しさは、全員が満足して長く一緒に弾ける仲間を見つけることだ、という事がわかってきた。

専攻科の学生になってしばらくした頃、フォルクマン先生のもとで兄弟弟子であるウヴェが、音大諮問委員会の委員に立候補してくれないか、と私を説得にきた。この委員会は学内で起こる諸問題を相談する諮問機関で、教授代表、講師代表、及び学生代表から成りたち、選挙で3人の学生が選ばれることになっていた。先生は「貴方はいっぱい伴奏して有名だから、選ばれるに違いない」と言われたが、私は学内オーケストラで弾いたりしている人と違って、直接知っているのは少数の人だけだし、外国人だし、どうせ落ちるだろう、それなら別に立候補してもいい、とあって承諾した。ところが蓋を開けたら、私は最高点で選ばれてしまい、音大諮問委員会の委員をつとめることになった。

この委員会では、学内で起こっている様々な問題について見聞することができた。例えばこのような問題だ。あるピアノ科の学生が、卒業試験でいい点を取って専攻科に進む事に決まったが、後になって、彼が試験で演奏した曲目は、3年前に中間試験で弾いたのと全く同じだという事がわかった。試験ごとに違った曲を弾くのは慣習法であり、あたりまえの事とされていたので、この卒業試験は無効だ、と学長が告げたところ、すぐさまこの学生は弁護士に相談した。弁護士からの「同じ曲を何度も勉強するのは極めて有意義なことで、云々」といった詭弁を弄した手紙を前に、委員会ではみな頭をかかえた。調べによると、この学生は入試でも同じ曲を弾いていたのだ。つまり、学生時代の5年間、殆ど新

しい曲を弾かなかった、というわけだ。彼の先生は、勿論そのことを知りながら、眼をつぶっていたわけで、それには何か裏の理由があるらしい、この先生は離婚して以来お金に困っていて、この学生の親に助けてもらっているのだ、ということまで各委員の知るところとなったが、結局、明記された規則が無い以上、裁判に持ち込まれたら勝ち目はない、ということから、この卒試は認めざるを得ない、と決定された。この後は、「試験では、同じ曲を繰り返すことは原則的に許されない」と明記されることになった。演奏出来る曲数の少ない管楽器などでは、同じ曲の繰り返しもやむを得ない場合があるので、「原則的に」というただし書きがついたのだ。

1988年夏に演奏家資格試験（コンツェルトエクサメン）を受けた。この試験は、点数はつけられず、受かるか、落ちるかだけであり、また、受けるところまでこぎつければ、殆ど必ず受かるものだった。試験は2回にわけて行われ、最初はフォルクマン先生の伴奏によりベートーヴェンの皇帝とラヴェルの左手の協奏曲を続けて弾き、また別の日にアルテ・オーバーというフランクフルトではもっとも重要な演奏会場でベートーヴェンの作品111のソナタ、ブラームスのパガニーニの主題による変奏曲、ヒンデミット、スクリャピンなどによるソロのプログラムを弾いた。

この最終試験が終わった後、私はフランクフルト音大ピアノ科の非常勤講師になった。